

特集

## フイールド・ミュージアムと 暮らし・教育の思想

大田堯先生とともにする都留フイールド・ミュージアム



都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

題字 黒部行子 絵 成瀬洋平(本学卒業生)



見沼フイールド・ミュージアムを

呼びかける

大田 堯

大田堯先生は、本誌第6号(2004年12月)の巻頭文「世界と子ども」を執筆してください、さらには都留文科大地域交流研究センターの事業である『つみ木広場』シンポジウム(2006年6月22日)や第四回地域交流研究フォーラム(2008年2月23日)に参加してくださいなど、本学の地域交流研究センターの活動に関心を寄せられ、また支援し続けてくださっています。

その大田先生が、ご自宅の近くにある見沼という広大な地域をフィールド・ミュージアムにしようという広大な地域をフィールド・ミュージアムにしようという構想が入ってきました。この「見沼フィールド・ミュージアム」構想とその動きについて、都留文科大地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門は、これからの交流可能性を考えつつ、本号の巻頭文用に大田先生にインタビューを申し入れました。

今年の3月25日に、フィールド・ミュージアム部門の畑と北垣(憲仁)の二人が東浦和を訪問しました。大田先生は先ず、安藤聡彦氏(埼玉大学教授)と私たち二人に、1時間半にわたって見沼の一部を案内してください、それからご自宅でインタビューに応じてくださいました。その内容を2回に分けてお伝えします(後半は17号に掲載予定)。タイトルと小見出しは、編集部は今泉吉晴氏の意見を参考にして畑が付けました。

なお大田先生は、本年5月に3日間にわたり都留文科大のフィールド・ミュージアムを視察されました。また本年10月31日には、大田先生の呼びかけで「見沼懇談会」が開催され、見沼にかかわる方々16名が顔を合わされ、それには畑、北垣の二人も参加させていただきました。

(畑潤 本誌編集長)

## 見沼を散策した思い出

僕は都留にたしか1977年に行ったと思うんですね。12月だと思うんですけどね。そして6年ですから、83年ですか。83年の12月に都留文科大を去る。これは6年間だと思っんですね。そのとき僕は65歳ぐらいではなかったかと思っんですね。今91歳ですから、とにかく30年近くになりますね。

その辞めたあとから、見沼へ妻と一緒に歩くようになったように思っんですね。ここからまっすぐに明の星学園のところへ行きまして、そこから見沼代用水の西縁（西縁）というのに沿って、(地図を広げて)西縁というのはこっち側ですけども、西縁に沿ってですね。ここは私の家ですよ。それでこのへんからこう行くと、西縁へ出るわけです。それで、この西縁に沿ってこう行ってこう帰る。何キロになるのか分かりませんが、2キロか3キロだと思っんですが、その間を毎日二人揃って1999年まで二人で一緒に歩いていたということがありますね。それが見沼の土を歩いたという時間ですから、相当長い期間です。その後は見沼へは行かないで、ちよつと足を痛めて近くを回るようになりましてけど。そこまでは見沼を散歩しているというか、歩いている。そこで見沼の生態にいろいろ触れましたよ。

カルガモの種類が子どもを連れて泳いでいるとかね。西縁をね。ハクセキレイやダイサギなどの鳥が来るとか、それからその当時は野草がたくさんありました。ワレモコウがあったり、キスゲ

関係のものがあつたりね。僕はそのころ野草に興味があつたんで、いろんな野草に注目していたんですけど、名前はだいたい忘れてしまったんです。そこらあたりにある雑草も影を潜めるようになるんですよ。ワレモコウなんかもすぐになくなりますしね。あれは真つ先になくなつたね。キスゲもなくなつた。スミレの類などは残つてましたけども。歩くなかで変化が見えるんですね。同時に風景が変化して、明の星学園でも横に長くなつたり、高くなつたりしましたね。そういう見沼の生態に触れるというか、そういうようなことはかなり長い期間にわたつてやつているわけですけど、とてもミュージアム構想などというのはその時にあるわけではなくて、一人の自由な散歩人というか、そういうふうな状況だつたと思っんですね。

## 歴史以前の歴史から問題を考えることは人間を考える上で非常に重要なこと

それで、見沼問題を考えるようになった一番最初はですね。今から4年前、2005年頃と思っんですけど、ある日、数名の方が、5、6名だったか、ここへおいでになりました。自分たちはお宅の近くの馬場小室山（ほんばおむらやま）というところの縄文遺跡を発掘している研究者であり、同時に市民ですという方々です。

僕は唐突なそういう訪問者と向き合いました。実はその近くに縄文の遺跡がある。それがだんだん開発が進んできて、危機的な状況にあつて、そ

れを守るためのいろんな運動をして、ある程度残っているけれども、なお将来、楽観も許さないし、市民にそのことをよく分かってもらわなくちゃいけない。そこを守っていくためには、市民の了解というものなしには不可能だから、われわれ考古学に関心ある者も市民と知識を分かち合うということを考えていかなければならなかったので、パブリック・アーケオロジ（市民考古学）、つまり民衆とともに考える、市民とともに考える考古学という考え方を大事にしたいと思うようになって、市民フォーラムをつくることになった。その市民フォーラムは市民を集めなければなりませんので、市民フォーラムの実行委員長を引き受けてくれという趣旨だったようなんです。しかしそのことははじめには言いませんで、とにかく現場を見てくれと言われました。

行ってみると、私のところから距離はそうありません。直線距離で言えば1、2キロだと思っただけです。そこに縄文土器が出ている。ここが6000年前ぐらいまでさかのぼることができるのだということでした。この特徴は、何度も、何世代も住民が住んだ形跡がある。住居跡の盛り土が重なっているんです。つまり古い住宅がいつぱいなくなつて、またその上へ後の世代が住宅を造つてという重層的な遺跡跡があるということが、現場に連れていって分かったんです。

すくそばに三室中学という中学校がありますね。「その中学はそこを見えますか」と言ったら、「実は中学とはあまり関係がありません」と言われました。教育の上でもこういうところこそ本当

に勉強になるんだ、という気もちがあつたのです。特にプレヒストリーといつて、人間がまだ日本人でないころの人間というか、肩書きのない人間と考えるということは人間を考える非常に重要なことなのに、という思いがあまりまして、そんなことを話していましたら、フォーラムの実行委員長になれという向こう側の正式の要求が出ました。結局、そのフォーラムの実行委員長ということになつてしまつたんですね。

役所もそこを市の指定にしましたものですから、いろんなことがあるごとに僕のところに通知がくるといふことになりました。だんだん引きずり込まれるといふような状態になつたんです。それは結局、見沼と関係のある遺跡なんですね。

## おれこそ見沼の主だと自覚する ような人もいて… これは並々ならぬこと

その人たちが昨年の秋、第5回のフォーラムを開くときでした。あそこを公園にしたいと言っているんですね。僕はそこだけを公園にするなんていうのを考えるくらいだったら、広い見沼と一緒に考えて、見沼全体をフィールド・ミュージアムといふふうの思い描いたらどうだと考えた。2008年9月10日に、馬場小室山の遺跡の市民フォーラムへ出て、そのときの挨拶のなかに、全体をフィールド・ミュージアムと考えて、その一環にその公園を位置づけるということにしたらどうだと

いう提案をやつた。これが一番最近の出来事だと思ふんです。

そういうことがありましてからは、見沼のことを調べるなどしまして、12月20日は、青木義脩さんという方にお会いしました。浦和のいろいろな重要な歴史的な箇所を一冊にまとめて、『浦和を知る事典』というものを著している方です。その方と、そのフィールド・ミュージアム構想というものをお話するにあつたので勉強会を始めたんです。その方にお会いしてその構想も述べ、その方は世界遺産にしてもいいというようなことをどこかで講演では言っておられましたけども、非常に共鳴していただくことになりました。

そういうことがありまして、埼玉新聞の新聞社に知つている新聞記者がいるので、何かの機会にそういう話をしましたら、見沼についての諸資料を丹念に集めているという人がいて、その人が埼玉市民図書館だと思ふんですけど、その資料によつて見沼のコナーをつくると思います。そういう出来事があるということに事寄せて、それを記事にされました。その後の談話に、フィールド・ミュージアム案を持つている大田の意見を、資料を集めたことに対する意見として載せた。見沼のフィールド・ミュージアムを構想している教育研究者の大田は次のように語つたと、1月5日に新聞に載つたんです。写真は僕の写真ではなくて、資料の写真と合わせて載るといふことがありまして、そのへんからずつといろいろな人に会つていくわけです。

その出会いの話もそれ自体みんなおもしろい





で、その翌日にはすぐ安藤（聡彦）さんをこへ招いて話し合いをして、そして、社会教育関係者の構想をまず話してくださいというようなことで、社会教育研究者たちの集いを持つということもここでやりました。そのへんから私の提案に対して賛成する方が多いなあというような感じを持ちました。

しかしそれには、見沼で実際に仕事にかかわっている人々と触れ合うことが必要だと思いました。見沼には市民として農場を持っているというような人々がたくさんいらつしやるんです。この人たちは非常にアクティブな市民の方でして、それぞれが大きな理想を持って見沼を守るんだというか

たちで、われこそ見沼を守っているというような自信を持って加わってくださいる方が何人もいらつしやるということが分かりました。おれこそ見沼の主だと自覚するような人もいて、なかなか他の人の意見にも乗らないとか、トラブルもたくさんあるんだというようなことも聞き、これは並々ならんことだなあと感じました。

## 見沼の農業青年に有機農業の伝統を受け止めてもらおう

調べていくにつれて、見沼は簡単にはいかないんだという思いをしながら、まず一番大事にしなければならぬのはだれかということを考えました。それはそういう後から入った市民じゃなくて、見沼を本当に守ってきたのは、水田を守りあの泥

濘の地を畑にして、そして今日に至る農民たちではないか。いろいろな困難を越えて農業を営んできて、市場経済のなかで、まったく不利な農業政策のもとでも耐えてきた、そういう人たちがこそ一番見沼を守ってきた主人公ではないか。こういうことを私は考えたので、農民の方に接触することが根本だとだんだん

気づくようになりました。ほかの市民農園も訪れましたけど、農民の方を、ということを考えました。

農民に接触するにはどうしたらいいかと考えて、ふと思いついたのは農業者大学校のことです。1968年だと思えますけど、農業者大学校というのを農林省が聖蹟桜ヶ丘につくるんですよ。他の省がつくると「大学校」ですから、そこは大学と言わないで、「校」の字がつくというところですよ。その前に、これは長い歴史になるからやめるけど、とにかく僕の研究は、戦後は農村教育から始めるでしょう。地域教育の系譜です。一番最初の本郷町（広島県）の地域教育計画ですがね<sup>①</sup>。それから地域教育計画がどうもうまくいかないということが分かったので、今度は村々に入っていくということをやりますね。地域調査をやるとき



に、当時の農林省は、「考える農民」というものを育てるといふ大きな普及活動をしていて、農民の生活指導までやるというようなわけです。

農林省にとつて、これはとにかく大きな大事業なんです。農業者大学校という、農業をやることが決まった若者を集めて大学校をつくるというんですからね。カリキュラムをどう作るかについて、普及部長から、東大農学部のエリートと僕に応援をと頼まれまして、教科目をつくっていく。こういう作業に、数学なら銀林（浩）さんとか、民間教育の活動家たちに知恵をもらって、試験問題をつくってもらおうというようなことをやって、第一回の卒業生がその3年後に出てくるんですね。そこで僕もずっと授業をするんです。いつまでやったか忘れちゃったけれど、十数年やりました。田嶋（一）君という人に後を受け継ぐということになったわけです。

そういう記憶がありましたので、農業者大学校の同窓生の中で見沼で仕事をしている農民の方はないかということを考えました。そしてそれに通じている人、もう辞めていた人なんですから、その方に電話をかけて聞きましたところ、見沼でイチゴの農業をやっている28歳の青年がいるということを知りました。

すぐ電話をしまして、ここへ来てもらったんです。同時にイチゴをたっぷりもらいました。第一級のイチゴをいただいたわけで、おいしくいただきました。それで彼と話をしてもらったら、本当に若くて未来を背負う、好ましい、非常にしっかりした青年だったんです。それで何をやっているのか

と聞くと、イチゴと言うのだけれど、そのときはそれで別れました。調べているうちに、その同じ同窓生の中の第一回の同窓生が小川町（埼玉県）に立派な農場、といつても大きくはないのですが、霜里農場しもむらのちやうばうというのをやっているのを知りました。そこではまったく

の有機農業であり、循環型の農業で、電気エネルギーも全部太陽光だし、自動車や電気も廃油を使っているというかたちで全く自給的にやっている農家で、全国に知られているというんです。金子美登よしののぶさんという人です。非常に有名な人になっているわけです。

その人のところに彼を連れていきました。有機農業の伝統を彼にも受け止めてもらって、見沼でやってもらいたいという思いがあるからです。彼も非常にそれに感銘を受けた。さりとてすぐにはできません。土を作るのにも最小限3年間は要るわけで、金子さんは30年かけているという状態なんです。それから、まねはずぐにできないけれど、やってもらう。そんなふうな農民にも触れていくという一環として、今朝もさいたま市の農業委員長と会うなどしているというわけです。

見沼には地権者が2000名ぐらいいると思いついて、その中にはただ土地が上がるのを待つて



買っておいたという地権者もいれば、定年退職で老後を水田と有機農業でやっているものもいるし、それから本格的にかんりの程度でやっているものもいるし、福祉農園ふくしのうゑんといって障害者を入れて、障害者の参加を得ることによって農園を営みながら福祉事業をやるといふ人もいますし、種々様々な人々がいます。それぞれに自信をもって仕事をしている人たちがいます。活動家市民ですからね。そういう人がいっぱいいるということも分かった。農民が一番発言をしないで黙っていて、その人たちの発言が目立っている。

④ 大田 堯「地域社会の教育計画」(1949年)『地域の中で教育を問う』(新評論、1989年)に所収

(おた たかし・都留文科大学元学長、東京大学名誉教授) インタビューの後半は「地域交流センター通信」17号に掲載します。

# フィールド・ミュージアムと暮らし・教育の思想

## 大田堯先生とともにする都留フィールド・ミュージアム



都留文科大元学長の大田堯先生が、本年の5月13日から15日までの三日間、本学地域交流研究センターのフィールドを視察されました。

5月13日(水)・今泉吉晴氏が、ムササビの赤ちゃん(チャメちゃん)を連れてこられ、みんなでその授乳の様子などを観察しました。午後は十日市場方面の、水庭さん宅(お寺)の湧き水の、水掛菜の畑を見学し、中屋敷フィールドを歩き、さらに車で楽山公園に登り大学のロケーションを眺めました。

5月14日(木)・大田先生はかつての学生であった「ムササビ娘」(15頁の「あの一人の女子学生」氏に会われましたが、そのあと、図書館前ピオトープと「大田堯先生のケヤキ」(10頁)と図書館内のフィールド・ミュージアムの展示をご覧になりました。午後は、今泉氏の観察小屋への小道をみんなで歩きました。さらに「フィールド・ノート」作成の学生たちと懇談されました。

5月15日(金)・まず地域交流研究センターの外を見学され、「奥隆行写真コレクション」などの刊行物をご覧になりました。それから都留文科大前駅の横のフィールドと駅舎内の展示場を見学されました。

この大田先生とともにした三日間は、私たち地域交流研究センターの関係者にとり、改めて自分たちのフィールドを見つめなおす機会になりました。

この特集は、大田先生との交流をベースに、次のような内容で構成しました。

A：大田先生の来訪の折の写真も織り込みながら、ご案内した都留フィールド・ミュージアムに光をあてます。(8〜14ページ)

B：大田先生は、巻頭のインタヴューで語られているように、ご自身の居住地近くの見沼(埼玉県)をフィールド・ミュージアムとして構想していくことを広く関係者に呼びかけておられます。その見沼にかかわる方々にも、見沼への思いを語っていただきました。(16〜17ページ)

C：大田先生の、このようなフィールド・ミュージアムへの関心は、都留文科大元学長時代の「都留自然博物館」構想に由来しています。その構想を記した文章の抜粋を掲載します。(15ページ)

D：都留フィールド・ミュージアムには、大田先生を介して、埼玉県市民の方々が訪問して下さいました。この方々にも訪問の感想を語っていただきました。(18〜19ページ)

都留フィールド・ミュージアムは四半世紀の歴史をもっているわけですが、大田先生の呼びかける見沼フィールド・ミュージアムの動きに接し、今あらたな交流の可能性を生み出しつつあります。

(畑潤・編集長)





## 中屋敷フィールドでの 麦作りをたのしむ

西丸堯宏

僕は2年前から、中屋敷フィールドでの稲作と麦作りに参加しています。地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門で機関誌『フィールド・ノート』を編集している仲間と一緒に年間を通して作業を行います。僕たちに農業を教えてくださいたいのは、十日市場在住の渡邊宗男さん(79)です。渡邊さんからは草鞋や注連縄の作り方や昔の都留のようすなど、農業のほかにもたくさんのお話を学んでいます。今年僕にとって2回目の麦作りとなりました。まず2008年11月10日に麦まきをしました。このとき初めての取り組みとして、おからをまきました。すると2009年4月18日の土寄せのときの麦のようすが前年と違つことに気づきました。麦は青々と生長し、下草はあまり生えていません。渡邊さんによると、おからが下草を抑えたこと。



麦はその実を噛んで、カリッとすれば収穫の頃合いです。麦のようすをみながら、7月10日に麦刈りを行いました。この日は日差しが強く、麦を刈る手にも汗がしたたるほど。今年の畑はイノシシが畑に立ち寄った痕がありました。麦は食べられることなく無事収穫できました。刈り取った麦を脱穀し、唐箕(風をおこし、実とごみを分ける農具)にかけて、収穫は60キロになりました。これは前年の倍です。収穫した麦は、毎年、上野原市の小保トシコさん(83)の製粉所で粉にします。小保さんは上野原で唯一、製粉業を続けていらつしやいます。製粉した小麦は編集部でうどんやパンなどを作つたり、お世話になつた方々にお分けしています。

渡邊宗男さんも小保トシコさんも麦や稲の育て方や種の保存の方法などを教えてくださいたいです。畑で一年を通して稲や麦の世話をすることで、生活に關わりの深い知恵を実地に学べるのが僕にとって大きな財産となっています。

来年度の麦も2009年11月15日にまきました。今年より収穫できること願いつつ、麦の生長を見守りたいと思っています。

(にしまる たかひろ・本学社会学科環境・コミュニティ創造専攻3年)



## ビオトープ広場の 大田堯先生のケヤキ

ーフィールド・ミュージアムの  
シンボル・ツリーの来歴

畑 潤

図書館前のビオトープ広場の中央にケヤキがすくすくと育っています。このケヤキには、次のような来歴があります。

今から7年ほど前の2003年3月29日に、ケヤキの巨木がある大田堯先生（都留文科大元学長）のご自宅で勉強会が開催されました。その前年に出版された今泉吉晴著『子どもに愛されたナチュラリストシートン』（福音館書店）は、厚生労働省の「児童福祉文化賞」を受賞するなどひろく反響を呼んでいたわけですが、教育の実践と研究に向かう人たちがこの本をテキストに今泉先生を迎えて勉強会をもったわけです。これには私も参加しました。

その勉強会が終わり暇を告げ門を出たとき、実生の初々しいケヤキが目に入りました。無造作に置かれていたプランタンにケヤキの種が舞い落ち勝手に成長し始めたようでした。種が落ちから3年くらいのものでしょう。今



泉先生が「畑さん、これをもらって帰しましょう」とニコニコして提案されたので、大田先生の許可を得て、二人で引っっこ抜いて持ち帰ったわけです。それを私が自宅の植木鉢で育て、安定してからは研究室にもちこみ見守りました。2004年4月7日に新図書館がオープンし、ビオトープの基本整備も進められていきました。その年の7月15日に、私と北垣憲仁さんの二人で、ビオトープの庭に植樹することになりました。植樹の場所は、北垣さんの「この真ん中にしましょう」という一言で決まりました。土をかける作業には、散歩中の市民の方も参加してくださいました。大田先生は学長時代に「都留自然博物館」（15頁）という考え方を提案されていますが、この構想と今泉先生のフィールド・ミュージアム構想とは深く共鳴する関係にあると考えてよいでしょう。大田先生も今泉先生も、その構想を人間、社会と教育の再生にかかわるものとして考えておられます。都留の地で芽生えたこれらの構想が、今日の都留文科大地域交流研究センターの素地になっていくわけです。新図書館前のビオトープに植樹したときは、暑い夏を越せるだろうかと心配したのですが、今はもう青年のように立派に枝を広げています。

（はた じゅん・編集長）



## 足もとの自然から 遠くの自然に想いを寄せる 観察会に

西 教生

2009年4月26日と7月26日、都留文科大地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム主催の観察会を行いました。観察会は都留市の広報や大学のホームページ、ポスターなどで参加者を募りました。両日とも富士急行線の都留文科大前駅に集合。観察会スタッフと参加者が簡単な自己紹介をして、双眼鏡やルーペといった観察道具をお渡しするところから始まります。

4月の「春の山を歩こう！」には市民のかた14人が参加され、学生や教員16人の合計30人で春の山を散策しました。前日に雨が降ったため予定していたコースを変更し、駅から大学裏山の縁を歩きました。初等教育学科の学生が中心となって、さまざまな植物の解説をしていきます。参加者の方からは「楽しく、色々な発見と、大学生と交流が出来て良かったです」という感想が寄せられました。

7月の「夏の山を歩こう！」には市民のかた14人の参加があり、学生や教員11人の合計25人で、4月の観察会とほとんど同じコースを歩きました。今回も学生が中心となって生きものの説明を担当。「いろんな年代の方と一緒に歩いてすごく楽しかったです」、「学生たちと交流をもち、同じ景色も違うように見えて楽しかったです」などの声が印象的でした。

僕は2回とも観察会のスタッフとして携わりました。参加された方が、その生きものについて知っていることを他の人たちに向かって話されている場面を何回か目にし、それが強い印象として残っています。それは僕たちが知らない植物の利用方法だったり、昔の裏山の様子だったり、この地域に暮らしている方ならではのものです。参加者同士の会話を聞いているだけでも興味深いのですから、この声をより多くの方に広く伝えていける観察会にしていきたいと思いました。

今後はわたしたちの足もとの自然から遠くの自然に想いを寄せられる契機となるような観察会を目指していきたいと考えています。

(にし のりお・現代GP特別研究員)





## フィールド・ミュージアムの 刊行物を紹介します

杉山由貴乃

地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門では、年5回、機関誌『フィールド・ノート』を発行しています。編集に参加しているのは学科も学年も異なる15名の学生たち。編集環境の整ったセンターの一室にそれぞれが都合のいい時間に集まり、地域の自然と人との交流」をテーマに、地域の人びとの暮らしや自然、生きものの情報などを発信しています。地域の方からお話を聞いたり、自然観察から学んだり。自分の経験から感じとったことを記事にし、冊子として読者に

発信していく編集部は、わたしたちの成長の場でもあり、地域のかたがたとの交流の場でもあります。

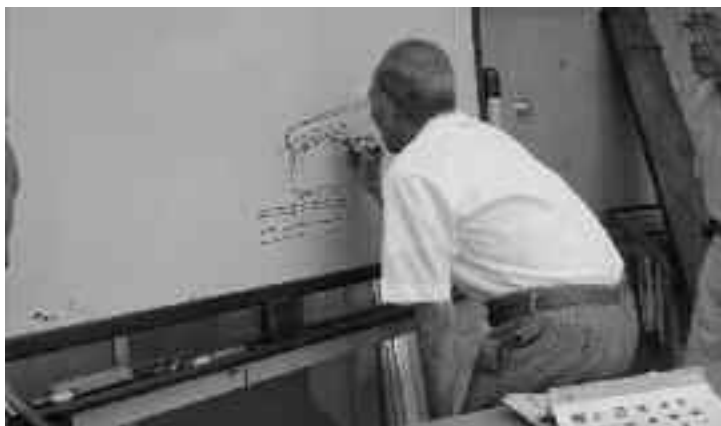
フィールド・ミュージアム部門では、ほかにも学生が主体となり「フィールド・ノートマップ」や「フィールド・キャンパスだより」を編集、発行しています。

「フィールド・ノートマップ」は、「フィールド・ノート」でこれまで蓄積してきた記録を整理し、地域の文化や自然の魅力をマップとしてまとめたものです。ぜひこのマップを手にとってじっさいに歩き、さまざまな「都留」を知ってほしい、という願いをこめて制作しました。本年度も新たな情報を加えた改訂版を発行する予定です。

また「フィールド・キャンパスだより」は、私たちの大学キャンパス周辺を自然に親しむ入り口とし、さまざまな生きものの魅力を紹介しようという想いから、毎月一回、キャンパスの身近な自然を記録し、発行しています。2003年6月から発行が始まった「フィールド・キャンパスだより」も、2009年9月で100号となりました。キャンパスの自然財産の記録としてこれからも発行を続けていきます。

(すぎやま ゆきの・本学園文学科4年)





## 野外遊びの 聞き取りを重ねて

桜井明子

昨年11月に「野外遊びの記憶」の聞き取りを始めてから1年が経ちました。資料として準備した39枚の写真の聞き取りは終わり、現在も月に一度ミュージアム都留にてどのようにまとめていくか検討しています。

聞き取りを重ねるうちに「遊びとは何か」を深く考えるようになりました。「遊び」は単に子どもの遊びとしてだけ存在しておらず、農作業の手伝いに近いものもあり、季節の移り変わりとも関わっています。春には山菜を採り、夏には川へ魚を捕りに行く。秋に栗を拾い、稲刈りのすんだ田んぼが遊び場となり、冬にはそこがスケート場。裏山や川、住まいに近い路地裏だけでなく田んぼでも遊び場で、ときにはその遊びに大人も関わることもあります。

これまでの聞き取りのなかで、写真に写っていて参加者がじっさいに遊んでいた場所が今どうなっているか博物館の外へ繰り出したことがあります。「水泳をするのにちょうどいい場所」だった三の丸発電所跡から富士急行線の線路に沿って都留市駅近くへ歩いたのです。桂川の、子どもたちが泳いだり遊んだりしていた「したはけ」と呼ばれる場所へ下りる道を探してみたのですが、今は藪になっていて下りることができませんでした。

いつも参加してくださる方の紹介で

都留トンネルができるまで鍛冶屋坂で「かなぐつや」（馬の装蹄をする仕事）を営んでいた方や、昔から大学の付近に住んでいた方をゲストに大学周辺の移り変わりについてお話を伺ったこともあります。また竹で編んだカゴや養蚕につかった道具を持ち寄って思い出話を語ってくださったこともありました。

私にとってこの聞き取りのいちばんの楽しみは、目の前で展開されるいきいきとした語りをじかに味わえたことでした。一回一回の記録を文章やデータとして残せても、そのときの臨場感を再現することはできないからです。それぞれがそれぞれの子どもの時代の遊びを夢中になって話す姿が印象的で、そうした楽しみをもっと多くの人と共有していきたいと思えます。そのためにも、いたいたい資料や聞き取ったことをどのようにまとめ、どのように伝えていくか。課題はたくさんありますが、今後も活動を継続していきたいと思えます。



（左）くらい あきこ・社会学地域社会研究専攻1年



はじめてこの都留を訪れてからもう一年が経とうとしている。はじめて都留に来た時に強く感じたのは、たくさんの生きものが身近に暮らしているかもしれない、ということだ。というのも都留文科大前駅の待合室を見たとき、そこには多くの生きものが手作りの展示で見事に紹介されていたからだ。それらは私がまだ見たことのないものばかりで、これからの大学生活でこうした生きものと出会えるのだろうか、とてもわくわくしたことを覚えている。

今年の4月にこの待合室は大幅にリニューアルした。今までのどこにでもあるような待合室から一変、木材の温もりのある場所へ変わった。それに合わせてパネル展示が新しく展示替えされた。そのころ僕は『フィールド・ノート』編集部に入った。そこで駅の展示をフィールド・ミュージアム部門がおこなっていることを知り、お手伝いをするようになった。ずっと気になっていた駅の展示がより身近なものになっていった。基本的に毎月1回展示替えをしている。そして今年の夏には自然に関する絵本が置かれ子どもから大人まで幅広く親しめる場所になった。

展示内容の充実で僕もついつい足を運んでしまう。少しの間では見きれないほどのさまざまな展示が並んでいる。

## 駅をフィールド・ミュージアムの 情報発信の拠点に

砂田真宏



る。なかにはリスの食べ痕など本物が展示されている。それを見てみると実際に探しに行きたくなる。僕はこの展示によって都留に多くの生きものが暮らしているということを知った。そして、自分で探しに行きたくなった。まだ展示されているすべてをこの目で見たいことはないが、こうした展示によって、ふつうに暮らしているだけでは分からないであろう都留の自然の素晴らしさを知った。

このことは都留の外から来た人はもちろん、都留の人でも共感してくれるのではないだろうか。この待合室の展示によって、地域の人はあらためて都留の自然を見直す場に、都留に住んでいない人にも都留を知るきっかけになってほしいと思う。ただの待合室ではなくここを拠点に都留の自然や文化に興味を持つ人が増えてほしいと思う。

(すなだ まさひろ・本学初等教育学科1年)



大田堯著

「わたくしの『都留自然博物館』」  
(1983年) より抜粋



大田堯先生の「都留自然博物館」構想を理解する手がかりとして、先生の学長時代の文章の抜粋を掲載します。

今泉教授を中心に、学生たちはケヤキとムササビをともに救う方法を熱心に検討している。そのために、植物生態学者の知恵までも借りている。石船神社とその近くの九鬼山とをつなぐ並木を植えて、閉じこめられたムササビが、よりよい採食地にいけるようにしようという案も考え出され、氏子側と話し合おうともくろまれていた。それも、ケヤキを枯らさぬうちに実現されなくてはならず、そのためには、いろ

いろな障害をなおいくつも乗りこえなくてはならない。

今泉教授を中心に、学生たちは、人類と自然の共存という現代社会の大きな課題に取り組んでいるのである。それも抽象的、哲学的ではなく、具体的にかつ科学的にである。そういう研究室をあげての集団としての活動の中で、最初に述べたあの一人の女子学生が育つたのであろう。彼女はその一人にすぎない。入口は消去法でも、その教室の雰囲気の中で燃え、自らをかえり、教育実習の場では子どもたちの心まで燃え上がらせることができたのである。この文章を書いているとき、

私も石船神社に向いてみた。大学からバスで三〇分近くかかる山間のまったくさびしい部落の一角にある。そこにはたしかにムササビに枝の樹皮を喰いとられた異様なケヤキが何本も聳え立っていた。そこで偶然かの女子大生とパツタリ出会ったのだ。卒業式を数日後にひかえた日である。ムササビの餌付をはじめたのだという。それによって少しでもこの神社の神木でもある樹木の樹皮の被害を少なくし、樹木とムササビの両方を何とか守ろうというのである。

私は山と山ととりかこまれたこの小さな都市の全体を、「自然博物館」



※写真はいずれも石船神社にて撮影

とみたてて、大学を拠点とした一つの学園都市づくりの構想をいま夢みている。東京の真中で、自然にふれることもほとんどなく育つ子どもたちが、この「自然博物館」にきて、一日でも二日でも勉強して帰る。大学の一部のスタッフや、将来はいずれ教師になるこの学生たちが、その学習を助けることができるようにする。そのためには、若干の動植物の生態観察のための施設をつくり、その管理も続けられるような態勢もつくり出さなくてはならないだろう。実際、すでに東京からバスにのって、子どもたちがこの町にきて、夕刻ムササビを観察して説明をうけて帰って行ったのである。(…中略…)

こうした自然と人間の共存という文明的な大きな課題と取り組みながら、しかも、身近な生活ときりむすんだこうした研究活動、教育活動の多様な蓄積があつてはじめて、私の構想する「都留自然博物館」は成立する。それは建物ではなくて、一つの人間関係の創造である。いや、人間と自然との共存関係をふくんだ一つの新しい生きた社会の創造である。来訪者はその関係に一時的にも参加することによって、現代文明の大きな課題を改めて実感できるのではなからうか。…

(大田『地域の中で教育を問う』新評論  
1989年 所収)

# 見沼にかかわる 人びと

大田堯先生がフィールド・ミュージアムを呼びかけておられる見沼（巻頭インタビュー）には、多くの方々が関わっておられます。ここでは、お二人の方に見沼への思いを記していただきました。

見沼への想い  
—— 馬場小室山遺跡との出会いから ——

鈴木正博

見沼はその昔、海でした。縄文時代がはじまる頃、地球は氷河期を終え、徐々に暖かくなります。やがて日本列島の形ができあがり、さらに海は現在よりも奥深く進み、浅い谷の見沼はもちろんのこと、奥東京湾とよばれるように埼玉県をこえて群馬県の南端まで河口湾が広がります。入江の奥にある見沼の海を縄文人が見逃すはずはありません。見沼には貝塚がつくられます。1年以上続いたとされる縄文時代ですが、見沼に海が形成されるのは7000年前のことです。やがて見沼の海は気候の冷涼化とともにだんだんと後退し、4500年前くらいには見沼は海ではなく河口域となります。

海辺から水辺へと見沼の環境が大きく変わりますが、縄文人はそのような変化にも負けず、環境に適応した豊かな生活をはじめます。水は生物にとって生命維持に不可欠な存在です。水辺には多くの植物が育ち、大小の動物も集まり、食物連鎖が形成されます。縄文人は水辺からの豊富な恵みに支えられたのです。それだけではありません。見沼を丸木舟で自由に行き来し、東京湾にも出て各地との交流も盛んです。

さらに見沼では竪櫛や飾り弓などのすばらしい縄文漆器が大量に発見されます。日常の生活に加えて非日常の道具を作る専門家の存在など、縄文むらの構成も複雑になり、見沼の代表的な馬場小室山遺跡と出会い、その保全と活用を進めながら、なぜこのような国史跡級の縄文むらが遺されたのか、不思議でなりませんでした。縄文時代の研究を通してたどりついた答えは、見沼の自然環境の素晴らしさです。見沼の恵みとそこに集う人びとの交流は縄文時代にとどまらず、人類史として現在、そして未来を考える地域遺産です。多くの方々と見沼の素晴らしさを共有したいと思います。

（すぎき まさひろ・「馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム」）

## 巨大都市圏に緑の大地を残す

北原典夫

東京巨大都市圏内に残る見沼田んぼ「見沼田んぼ」は、3千万人余りが集住する東京巨大都市圏の20〜30キロ圏、さいたま市と川口市の東側に広がる1260ヘクタール（東京の豊島区とほぼ同じの面積）の「農的な大規模緑地空間」です。

東京に隣接する埼玉県の南部地域は、



ソバの花咲く私たちの農園





昭和40年代からの首都圏の拡大の中で、500万人余（デンマーク一国の人口に匹敵する）の人口が増加し、宅地開発のラッシュの中で、緑地が大きく減少していきました。

そのような緑地環境の後退の中で、県民（現在700万人余）の将来の居住環境や災害対策を考えると、大規模な緑地空間を構造的に残していくことが是非とも必要でした。

**大規模緑地空間の保全政策の提起と10年間続いた政策討論**

このような政策的必要性を踏まえて、1984年、県では、県、関係市及び学識経験者からなる「見沼田圃保全検討委員会」を設置し、「見沼たんぼを農的な土地利用を中心とした大規模緑地空間として保全・活用する」という報告を2年間かけてまとめました。（ちなみに筆者は、その時の担当主査でした。）

しかしながら、開発規制の緩和とゴルフ場開発が時代の流れとなっていたこの時期に、「見沼たんぼ全域を、農地利用を中心しながら大規模緑地空間として保全・活用する」という政策提起は、当時の開発政策推進の県幹部から「書生論」として全面的に否定されることとなりました。その後、県や市の開発推進姿勢と見沼たんぼの保全を望む住民の開発反対運動とのぶつかり



さいたま副都心と見沼たんぼの実りの秋

合いの中で、県民やマスコミを巻き込んだ10年間の政策大討論の時代が始まりました。

**地域の将来をめぐる真剣な学びと討論の必要性**

首長の交替もあり、1995年、埼玉県と関係市及び関係農協の代表や環境保護団体の代表などが参加する「見沼田圃土地利用協議会」で、「見沼たんぼ全域を農地・公園・緑地等からなる大規模緑地空間として保全・活用・創造していく」という政策方針が合意され、確立されました。

1995年の合意までにいたる10年間の大論争や諸運動は、住民や関係団体、そして行政などに、多くの真剣な学びの時間をもたらしました。フィールド・ミュージアム運動が、特定地域を真剣に学び考え提案するという意味では、当時から、見沼たんぼは、県民あげてのフィールド・ミュージアム地域ではなかったかと思う次第です。

（きたはら のりお・見沼たんぼを青少年とともに学び楽しむ会事務局長）



2009年8月27日、埼玉県の市民の方々が都留のフィールドを訪問されました。

## フィールドミュージアムって？

島田由美子

太田堯先生から私たちの住む埼玉県の県内地域に位置する見沼田んぼをフィールドミュージアムに、との呼びかけがあり、その実態を知りたくて都留にうかがったのでした。8月27日、都留文科大前駅に降り立ち目にした駅舎と樹の匂い、そこに置かれていた「フィールド・ノートマップ」を手にして、心はもうフィールドミュージアムへ一直線。北垣（憲仁）先生、坂田（有紀子）先生が案内して下さい、都留の景観や樹木、草花、田んぼそして川や富士山麓の溢れる湧水などに直かに触れながら、いろいろとお話を聞かせていただきました。そしてどんな質問にもとても丁寧に、そして暖かい、穏やかな眼差しで話してくださる、そのお二人からこの地を愛し、大切にしているというそんなお気持ちを強く感じました。

見沼田んぼにも長い歴史、農業と人びとの暮らしや文化、そして様々な生き物たちが生息する豊かな自然が残されています。私もこの見沼田んぼの保

全活動に20数年関わって来ました。なぜ、フィールドミュージアムなのか、そのヒントをお二人から、そして大学という教育機関で取り組むことの意義に気付いたように思います。

その土地に住む人がその土地の「環境」を丸ごと受け入れ、そこを大切に思う、そこから始まるさまざまな取り組み、それはまちづくり、人づくり、ふるさとづくりでありフィールドミュージアムはそのきっかけをつくる拠点ということなのでしょう。そこに住んでいても地域のことを知らない、その魅力に触れることもない、それでは自分のまちを好きになることはないでしょう。子どもたちに生きものたちとの触れ合いを、充分な自然体験を、そして生物多様性のこの地球のことを伝えていける、そんな私たちのまちであってほしい、と心から思います。

フィールドミュージアムが自分のまち大好き人間を増やす、次世代へかけがえのない地域の環境を引き継いでいく、意義ある活動なのだと思います。そしてそれは「自治」にとつての原点でもあると思いました。

(しまた ゆみこ・NPO法人見沼ファーム21  
理事長、埼玉原さいたま市在住)



都留文科大のフィールド・  
ミュージアムを訪ねて

生井弘明

2009年8月27日、都留文科大の学長をされたこともある大田堯先生が主宰する「人が育つことサークル」メンバー7名とその子どもたち4名の計11名、「アトリエ・ゆう」の皆さん8名、合計19名が、大田先生の紹介で都留文科大のフィールド・ミュージアムを訪れました。

案内していただいた北垣憲仁先生によりますと、都留の町全体を人も含めて自然環境の中で生息する動・植物をまるごと観察し、生き物の本来の姿を学習する博物館とのことでした。「本物を見る」という北垣先生の言葉が印象的でした。また、「そこに住む人も含めて」というところが、日頃の大田先生の自説が感じられて興味深かったです。両側を山に囲まれた谷地に沿って創立した都留文科大は、自然豊かなキャンパスが広がり、その中にムササビが棲息する森があります。

私たちは北垣先生と3人のスタッフの案内でその森へ行きました。夜行性のムササビが座布団のように両手、両足の膜を広げて林の中を飛行するのが観察できる観察会も年に何度か開かれているとのこと、できることならそ



の姿を今夜にでも見てみたいというメンバーもいました。

その後、地下水脈を通って湧き出る湧水の源泉を訪ねたり、冷たい水を一旦回遊させて温めることで稲作に適する温度にする田圃を歩いて、人間の知恵に感心したりしました。

大学のキャンパス内には、大田先生宅から移植された5メートル位の櫟があり、その櫟をバックに記念写真も撮りました。

翌28日の朝日新聞「天声人語」に実際の空や風、患者を見ずに、パソコンのデータばかりを頼りにする気象予報官や医者の話が載っていました。改めて北垣先生の「本物を見る」という言葉が浮かび、この学習が将来職業人として大切な人間形成の基礎を養う要素も持っていることを学びました。

(なまい ひろあき・「人が育つことサークル」、  
埼玉県草加市在住)



## 『文大ボランティアひろば』——2年目をむかえて—— ～新しい動きとしての「いこいのひろば」の誕生～

地域交流研究センターセンター長 杉本光司

地域交流研究センターと都留市社会福祉協議会とが連携して、新しく「文大ボランティアひろば」が生まれたのは、昨年6月のことでした。前地域交流研究センター長の西本勝美さんから、今年4月に、その職務を引き継ぎ、この「ボラひろ」(略称)の一員として参加しています。

毎月第4水曜日の午後6時15分に、学生ボランティア団体(Σソサエティ、つくしの会、つる子どもまつり事務局等)代表メンバー、市内ボランティア有志、授産園みとおし、都留青年会議所、そして都留市社会福祉協議会からのメンバーが、大学に集まってきます。最近は、市民の方が、ボランティアの募集告知のために出席する日も珍しくありません。

ここに集うメンバーからの自発的な意思で生まれたのが、「ペットボトルのキャップを集めて世界の子どもたちにワクチンを届けよう！」運動でした。この活動も大きな輪となって拡がり、参加している学生たちにも大きな希望が生まれてきました。

こうした中で、今年の6月に「ここに集うメンバーで、何か一緒にやってみよう！」という新たな目標が掲げられました。そして、当初から中心メンバーの一人として参加しています。「授産園みとおし」の佐藤保成さんから提案されていた、「障がいのある方々への余暇活動支援」の実現のための取組みを行うことになりました。ここ「文大ボランティアひろば」の交流から派生したプロジェクトとして位置付けることにより、関心のある人たちが気軽に参加できる場として、その名称も『いこいのひろば』と名付け、まず、障がいのある人たちとその身近にいる人たちの声をじっくり聞こうということ、この新しい活動がスタートしたばかりです。

ここに参加している学生の、限られた時間の中での生活の場として選んだ『都留』に対する地域愛の強さには驚かされます。「誰もが住みやすい都留市」を作りたいという熱い思いが、大きく拡がって行くことを願っています。

(すぎもと てるじ・地域交流研究センターセンター長)



第一回「じっくり話し合う会」終了後、反省点など出し合う。



### 「いいのひろば」とは

下平佳樹

自分の得意とする仕事や分野で一生懸命輝いている人たち。一度何かに挫折しても諦めずに頑張り続けている人たち。ハンディキャップを抱えながらも日々を楽しく生きている人たち。そういう人たちの力になりたい。地域のために何かをしたい。そんな思いを胸に私は所属するボランティアサークルつくしの会を通して、これまで様々な地域活動に参加してきました。

そういった出会いの中でいつも教えられるのは、自分が理解していることなんというのほんの少しなのだということ。経験によって裏付けされた人の想いや考えは、本人以外は簡単には計り知れないのだということです。自分にとっては他愛のないことでも、人によってはそれが、何よりも重いときがあるし、その逆もあることに気づかされました。

会の中で話し合いを重ねていく中で、一番の課題となったのが私たちだけでこの会を進めていっても良いのかということでした。つまり、当事者である障がいを抱える方々の望むもの、意見を抜きにして進めて行くのは、何か違うのではないかということです。例えば私たちが何か計画・企画を行ったとき、私たちは障

がいを抱える方々が喜んでくれる、必要としているのだと思つてやったとしても、当事者にしてみれば全然そんなことはない。そんなことよりも他にものごとやってほしいことがあるというすれ違いが起きてしまうことが予想できると思います。つまり私たちが当事者の立場に立つてみようとしても、どうしても「想像する」ことしか出来ないのです。だから「今回のじっくり話を聞く会」を通して、話し気持ちは聞いて意識を共有していくこと。そして私たちと一緒に活動してくれる当事者・地域の方々を集めて、共に活動していくことから始めていくことになりました。

(しもだいら よしき・本学社会学科現代社会専攻 3年)

### 「いいのひろば」の今後の展望

内田哲也

十月四日、第一回じっくり話し合う会が開かれました。和やかなムードの中でゲームをしたり、お茶とお菓子を楽しんだり、そして様々なことについて話をしたりと、とても有意義な時間となりました。当初の目的である、地域の方々の二

ズを知ることでも大事ですが、まずは会そのものが楽しいものでなくてはなりません。そういった意味では、まず楽しかったという感想が出たことは成功といっても良いのではないのでしょうか。もちろんそれだけではなく、話の中で学ぶこと、働くことへの強い意欲や、将来に対する真剣な思いを聞くことができ、私たちのこれまで接し方だけでは分からなかったことを知ることができました。これまでもボランティアの中で接してきたことだらけでした。

さて、第一回を終えましたが、ここで満足してしまうのではなく次へと活かしてより良いものを作れるようにしなければ、このプロジェクトも単発になってしまいます。これからさらに話し合いを重ね、まずは定期的な会を開くことを目標に、次へとステップアップしてゆきたいと思えます。目指すゴールはノーマライゼーションの浸透した地域ですが、その第一歩は、まず実際に交流をすることなのではないでしょうか。

この会が地域と大学、ハンディの有無様々な主体が交流する機会となる場へと発展してくれることを期待したいと思います。

(うちだ てつや・本学社会学科現代社会専攻3年)

安田純平氏講演会報告

— 地域交流センター主催 —

# 「戦争民営化と出稼ぎ労働者の実情——イラク戦争の現場から」

佐伯奈津子

6月26日、本学地域交流研究センター主催で、フリー・ジャーナリストの安田純平さんをお招きし、講演会「戦争民営化と出稼ぎ労働者の実情——イラク戦争の現場から」が開催されました。社会学科の講義「現代世界と平和」の一環でもあったことから、学生を中心に約40人程度が参加し、講演後も安田さんとのディスカッションがつづくほど、刺激的な講演会でした。

2004年にイラクで拉致された経験もある安田さんは、2007年に民間警備会社の料理人としてイラクに「潜入」、戦争の民営化と出稼ぎ労働者の実態について取材されました。出稼ぎ労働者の送り出し国であるネパールまで足を運ばれ、緻密かつ精力的に事実を追究されています。

イラクにおいて、米国関連事業で働く民間人労働者の数は18万人、米軍兵士の16万人を上回っています。民間人労働者の内訳も、米国人2万1000人にに対し、イラク人11万8000人、米国人以外4万3000人です。イラク戦争は、これまででない規模で、民間人労働者が動員される戦争となっています。

安田さんは、この戦争の民営化について、2つの理由をあげられました。

第1に、戦争によって利益を得る軍事ビジネスの存在です。チェイニー前副大統領や、イラクに大量破壊兵器があると主張したテネット元CIA長官などが民間軍事会社を経営していると伝えられています。第2に、冷戦後の効率化と軍縮によって、より安い労働力が求められるようになったことです。仮に武装勢力に拘束された場合、その身代金は、日本人なら1万〜2万ドル、ネパール人なら5000ドルと言われています。

安田さんはさらに、日本の自衛隊のイラク派遣について、米軍の物資輸送、つまり兵站を支えており、純然たる戦争参加であると指摘されました。

イラク戦争は「テロとの戦い」と報じられていますが、命の重さが国籍によって異なるという厳しい現実、そして「安い」命によって戦争が支えられ、一部が軍事ビジネスによって莫大な利益を得ている構造について、考え直す必要があるのではないのでしょうか。

(ナニキ なつこ・本学兼任講師)



ネパールの山奥の壮大な棚田（映像）で農業を営む人たちが、戦場への「出稼ぎ」に出ていく仕組みについて語る安田氏

# 市民が学ぶ、農のある生活の醍醐味

地域交流研究センター「暮らしと仕事」部門では、「地域再生」のための学習活動を実施しています。昨年は林業について講師をお招きしました。本年度は、学生たちが市内各地で農作業に取り組み動きが活発化してきたことをうけ、「市民の方から学ぶ畑づくり」を二回シリーズで開催しています。その第一回は、センターと学生サークル「Social 料理」の共催で、大月市在住の藤本兼三さんをお招きしておこないました。畑づくりをめぐる、哲学的なお話から実践的なお話まで、幅広く教えていただきました。ご自身が育てた野菜を前にしてのお話は、説得力あふれ、畑に描く夢がいっそう広がりました。お話をうかがった学生2名の感想を掲載します。

(田中夏子 副編集長)

## ロマンに溢れた畑

宮澤勇氣

7月13日、大月市から「家庭菜園のスペシャリスト」の藤本さんが、いらした。約三時間にも渡る講演は、初めて聞く新鮮な知識とロマンに溢れていた。

約9年間かけて、ようやく土が出来上がったという藤本さんの畑では、白い茄子や売り物のように綺麗なトマト等の様々な野菜を大量に作るという。しかしそれらを売ることはせず、お隣さんにおすそ分けしたり、肥料となる鶏糞と交換するそうだ。そのときに評判が良かった

新種の野菜が広まって、地域一帯で同種が育てられる、ブームまで起こるといいます。私は、とても驚いた。畑はロマン溢れるコミュニティの場だったのだ。自分の畑のみでなく、外に広めて大きな交流の輪を作る藤本さんの大規模な「遊び」は温かく、やり応えのある魅力的な活動に思えた。

自分もサークル活動を通して、小さくても温かい輪を作られるように、積極的に活動していこうと思った。藤本さん、今回はためになつて、ロマン溢れる貴重なお話をありがとうございました。

(みやまき ゆうき・本学初等教育学科1年)

## 畑とは、信頼の上に成り立つ

太田真紀

2009年7月13日に、大月市にお住まいの藤本さんが、私たちのSocial 料理をはじめ、学生のために講演会をして下さいました。藤本さんは、本業ではなく趣味の一環として、野菜作りをされている方で、当日は、ご自身が作られているユニークな野菜の数々を持ってきて下さいました。そのユニークな野菜というのも、白いナスや、棘がとても鋭いキュウリ、またハーブの一種であるルバーブという珍しいものなど、たくさん種類があり、とても驚きました。

藤本さんがおっしゃっていた言葉で最も印象に残っているのは、「畑とは、信頼の上に成り立つ」という言葉です。私達のように数十人が集まって畑をおこしている場合、一人が畑を放置していたら、その畑に棲みついた害虫が隣の畑にまで侵入し、荒らしてしまう、という状況に陥る危険もあるのです。だからこそ、「自分だけの区画なんだから、放っておいてもいいや」と考えるのではなく、皆が良い気持ちで野菜を作れるように、一人ひとりが真剣に畑に打ち込むことが大切なんだと思いました。そして、仲間を信頼し、また、自分も信頼されるように

なって初めて、一つの畑が成り立つのだと思えました。

私は、野菜作りというものは、生き物と生き物の触れ合いだと思っています。人間の野菜に対する気持ちは、野菜にも伝わるだろうし、それによって野菜の成長もグンと変わってくると思います。まだ、野菜作りに携わって日の浅い私達ですが、藤本さんの野菜作りに対するひたむきな姿勢を学ばせて頂いたことを、これからのサークル活動に生かしていければ、と思います。本当に、有意義な時間をありがとうございました。

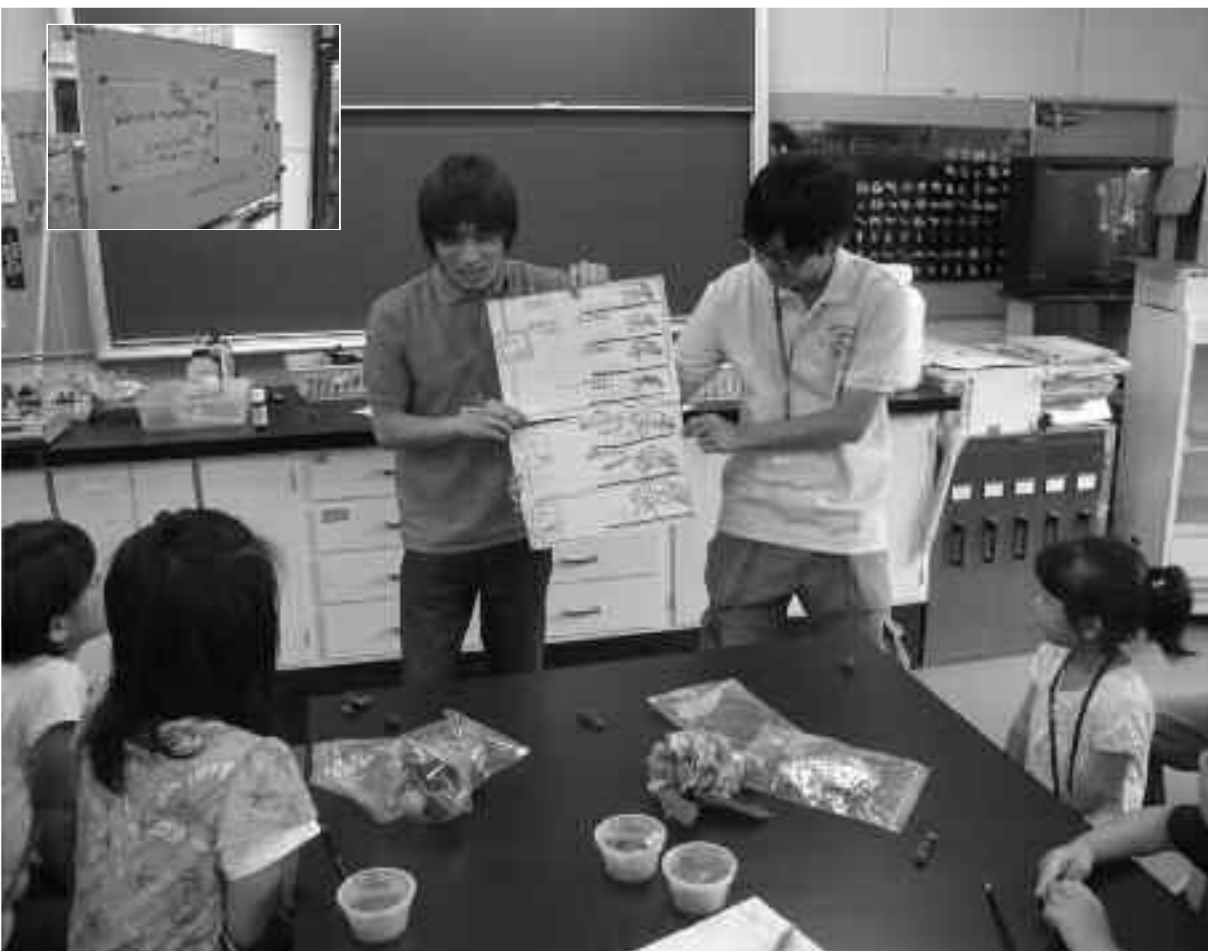
(おおた まき・本学初等教育学科2年)



藤本兼三さん(前から2列目、左から5人目)を囲む、学習会に参加した学生たち

## 市民公開講座が開催されました

—平成21年度—



「夏休み親子で楽しい自然・  
科学教室」実施報告

山森美穂

スライムの実験で学んだこと

與畑幸徳

平成21年度の市民公開講座として8月1、2日に「夏休み親子で楽しい自然・科学教室」を開催しました。都留市内の小学校を通じて「自分だけの小さな博物館を作ろう」「スライムの実験」「天体観測」「遊んで学ぼう物理」「葉脈しおり作り」の5つの講座への参加者を募ったところ、子ども40人、保護者34人の参加がありました。本学教員6名のほか、初等教育学科の学生23名も、内容の選定・準備・当日の案内や指導などを担当しました。内容が天候に左右される場合の対応などの課題点が浮かびましたが、参加した保護者の方から「このような機会をもっと設けてほしい」という嬉しい声をいただきました。

化学ゼミで担当した「スライムの実験」では、子どもたちにはもちろんのこと、保護者の方にも楽しんでもらえることを目標に、4年生4人には準備を重ねてもらいました。単にスライムを作って遊ぶだけでなく、物質についての興味を喚起できればと、高分子ゲルの性質を垣間見するための実験も取り入れました。小学校教員を目指す学生たちにとって、意義ある体験になったと実感しています。

(やまもり みほ・本学初等教育学科教員)

スライム作りは、私が小学生の頃にもやったことがあるので、とても楽しむことができました。色や大きさなど自由に作ることができるとも楽しみのうちの一つです。今の小学生にとっても興味に沿う素材であり、当日も小学生はもちろん親御さんにも楽しんでいただけました。また、私が小学生の頃思いつかなかった蛍光粉末や鉄粉を入れた磁石にくっつくスライムなども好評でした。

いま小学生の理科離れが叫ばれていますが、指導する側が興味に沿った実験をしつかりと準備することができ、かつ楽しめる要素を織り込むことができれば、理科離れも解消していけるのではないかとこの光明が見えました。こういうことを教育現場で活かしていくことができればいいなと思います。楽しい実験を通して子どもたちの心をしつかりと掴んでいく教育が大切だと思います。

(よばた ゆきのり・本学初等教育学科4年)





# 地域の自然と人びとから学ぶ 「シオジ森の学校」との連携

本学地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門では、大月を拠点とする「シオジ森の学校」と連携し、都留市の鹿留川支流大沢のほとり子どもたちと一緒に毎年キャンプをおこなっています。キャンプの内容は夜の動物観察、川遊び、草木染、ドラム缶風呂など盛りだくさん。大学生たちはこの日のために3ヶ月も前から準備と練習を重ね、その過程で様々な苦労と葛藤を経験し、子ども

もたちとのキャンプに挑みます。キャンプの当日、学生たちはこれまで見たことのないような頼もしい姿を見せてくれました。まるでさなぎから蝶に変身するかのよう。教室から飛び出し地域の自然と地域の人々の中で生き活きと学び合う、そんな取り組みが少しずつ実を結びつつあります。

(坂田有紀子)

## キャンプを企画して

横森 隆

今回のキャンプでは「地産地消」、草木染、皮でなべふき、ゴミをなるべく出さない、など、環境教育面について力を入れながら活動しました。子どもたちの意識も環境面で強くなり、歯磨き粉を使用して歯をみがいている人に注意をしたり、ごはんを残さず食べたり、残そうとしている子を励ましたりと、伝わったのではないかと感じました。僕が担当した「川遊び」は水遊びが中心で終わってしまうのではないかと危惧

していたのですが、子どもたちは水生昆虫にもものすごく興味を持ち、時間いっぱいまで水生昆虫の図鑑と箱めがね、網を両手一杯に抱え、観察している姿が多く見られました。そのせいか、子どもたちの質問も鋭く、「ヤゴは大きくなったらトンボになるけど、ヒゲナガカワトビケラもそうなの?」と問いかけてきた子もいました。川でよく見られる生き物の生態などについてクイズにして子どもたちと楽しみながら観察するなど、もっと深く教材研究をおこなえば良かったと思います。しかし、キャンプ中どの活動にも子どもたちは興味を持ってくれ、非常に楽しく有意義なキャンプになったのではないかと思います。

(よこもり たかし・本学初等教育学科3年)

## キャンプに参加して

松岡 勇氣

私は今回の鹿留川でのキャンプに参加して、子どもたちが川遊びで楽しんでいる姿やムササビや昆虫を発見して感動している姿を見ることができ、とても楽しい2日間を過ごすことができました。また、環境教育についても、子どもたちにとっては体験から学ぶことが最も受け入れやすいのではないかと、いうことをキャンプを通して感じました。具体的

には川を汚さないように米のとぎ汁を洗剤の代わりに利用したり、ゴミを減らすために野菜を皮まで使ったり、と日常生活の中で簡単に実践できる工夫を紹介しました。

子どもたちは環境への意識を日常生活から学ぶものだと思うので、子どもたちが今回の実践を家庭に広げていってくれるといいなと思います。

(まつおか ゆうき・本学初等教育学科2年)



## 情報教育における地域の小中学校との連携

—「大学と小中学校との連携に関する手引書」を発行する—

杉本光司

平成10年（1998年）に小中学校のISDN回線によるインターネット接続のアクセスポイントとして本学の設備を開放したことを機に、情報教育を通じた小中学校との連携プログラムが始まりました。小中学校教員向けに大学の教育設備を使用した研究会や研修会を開催し、

そして平成12年（2000年）には光ケーブルによる「都留市地域ネットワーク」が整備されたことにより、インターネットを利用した新しい取組みを授業や課外活動の中に生かしていこうという提案が行われ、これまでさまざまな交流プログラムを実施してきました。



この間、小中学校においても、公式ホームページを作成する流れが生まれ、学校が独自で立ち上げて運用を行ってきました。しかし、ホームページは、日常的、定期的な更新作業が必要となります。この作業は、一部の教員が自分たちの日常業務以外の奉仕的な時間の中で行われてきました。そして人事異動でその担当教員が転任後は、その作業が引き継がれることなく、放置されたまま、もしくは閉鎖せざるを得ない状況になっていった学校もありました。

こういう現状に対して、何かしらの支援を求められ、今年度より、情報センターと「情報メディア演習Ⅰ・Ⅱ」受講生との協力により、大学のサーバーに、新

しいホームページの作成用に、「Phone1」というオープン・ソースを利用した、全ての学校が同じ方法でホームページを作成・運用を行っていくシステムを提案し、承認されました。

これを機に、「大学と小中学校との連携に関する手引書」を作成し、各小中学校に配布いたしました。これには、遠隔授業手法、ホームページ作成方法の他に、HTMLの基礎知識、エクセル (Excel) 講座、アクセス (Access) 講座等、小中学校教員が日常的に必要なものについても、身近な教材を例に掲載しています。

今後は、いろんな分野の教員がホームページ作成に関わったり、遠隔交流に参加できる環境作りを目標に、学生たちと一緒に日常的に支援を行っていくことを目指しています。

（すぎもと てるじ・地域交流研究センター長  
情報センター）

市民と学生たちが共同で担う「つる子どもまつり」が第40回を迎えました（5月17日）。

# つる子どもまつり 40周年に寄せて

宮原 弓

私は先生になるための勉強にと、入学したときからつる子どもまつりの事務局に入りました。今思えば、子どもと接するのは子どもまつりや芸術鑑賞の当日が主で、あとは実行委員の市民のみなさんと、そして学生の仲間との付き合いが「濃密」でした。夜遅くまで学生の部屋やお店で話したり、学生同士なら昼休憩や空き時間に学食に集まったり。そして、子どもまつりならではのく・大使・といって、各実行団体の一員に事務局員がなって、団体の活動を理解し子どもまつりの活動を伝える「システム」。私はそこで詩友会や新婦人、親子映画や職人会、牛乳パック回収のさきかけのグループ「たんぽぽ」、平和委員会や「八朔inつる」などの活動に参加することができ、普通の学生生活ではできない体験・つながりが得られました。それは卒業後臨時教員・保育士として親子劇場や新婦人、母親大会などに関わってきた私の大きな力となっています。

「つる子どもまつりは五月の第三日曜

日」。このことを私の子どもみたいな若さの学生が、そして学生を見守り続けてくださった市民のみなさんが今も大切にしてくれたから、40周年を見に訪れることができました。懐かしい先輩・後輩、市民の方とお会いでき、また残念ながら当日行けないメンバーとも連絡し合え、明日へのエネルギーをいっぱいもらいました。実は子どもまつりを通して見るのは今回が初めて。開・こ・く・式を終えた子どもたちが待ちきれないというように各・く・に駆け出して行く後姿を見られただけでも、来た甲斐がありました。何十年経っても、子どもの求めるものって変わらないんですね。

50周年に向けて、ぜひ実行委員と参加する子どもを増やしましょう。それは広島で子どものための活動をする私の課題でもあります。一緒に頑張りましょう。

（みやはら ゆみ・1991年に初等教育学科に入学  
現在広島県に在住）





平成21年度 都留文科大学現職教員教育講座

「教師の子ども理解と学習指導」が開催されました。

7月29日(水)～7月31日(金)

## 都留文科大学の文化に触れて

天内美加子

以前から、山梨の都留文科大学に行ってみたくて私は思っていました。というのは、岩手県で開かれた、カウンセリング講座主催の先生に、たくさんの都留文科大学の生徒さんたちがお手伝いに訪れていたことに、心底感銘を受けたからです。

夏休みも近づき、縁合って山梨に行くことが出来、今回の講座に申し込みました。現在私は、青森県の田舎館村という小さな小学校で特別支援の活動を行っています。そのため、講座の内容では「小学校」をテーマにしていることがとても魅力的でした。そして、こちらの大学では初等教育に力を入れているということも初めて知ることが出来ました。

私が今回の講座を受講して、今でも肝に銘じているのは「子どもを急がせてはいけない」ということです。これは、佐藤隆先生の講座でお話してくださった、フィンランド教育の方針の一つである、「教師は子供を急がせてはいけない」と

いう、とても興味深い言葉でした。私は自分自身を振り返って、日常子どもたちに「早く」「急いで」「ちょっと遅いぞ」など急がせることに使っている言葉が一日の節々にあったことに気づかされました。

そこで、現場に帰ってからは、次の指示内容を話してから「子どもを待つ」とにしました。そうすると、急がせて待っている時間と、指示をしてから待つ時間と何ひとつ変わらないのでした。その結果、私は思いました。「急がせること」は「焦らす時間」を子どもに与え、「待つこと」は子どもに「考える時間」を生み出しているんだなあということ。そして、「待つ」ことによつて、確実に子どもが育つということを実感しました。

講座が終わった後にも、大学の広報の方がたにご親切にして頂き、保健室や相談室の先生方ともいろいろなお話をさせて頂くことが出来ました。とても有意義な時間に心から感謝申し上げます。また、地元の「すいすい合格水」もとても美味しかったです。

(あまない みかこ・田舎館村立田舎館小学校所属)

第12回「南都留地域教育フォーラム」が10月29日、下吉田第一小学校において七つの分科会構成のもとに行われました。本学からは、高田理孝、吉住典子、佐藤隆、田中夏子、西本勝美、森博俊、杉本光司の7名の教授が助言者として参加しました。

### 第12回「南都留地域教育フォーラム」に参加して

渡邊英子

「地域の子どもたちは、地域で育てる」という基本理念のもと、平成10年度から始まった「南都留地域教育フォーラム」は今年で12回目を迎えたそうです。

全体会では、毎年、地域と連携した中で活発に活動している子どもたちの音楽活動をアトラクションとして紹介しており、今年度は、下吉田中学校の「ソーラン隊」の演技を見せていただきました。子どもたちの一生懸命な迫力ある演技の中に、取り組みに対する真剣な眼差しとチームワークが見られ、子どもたちの熱い思いを感じながら、たくさんの元気をもらうことができました。

分科会では、特別支援学級の担任という立場で第六分科会に参加しました。「広がる特別支援」というテーマで学校・家庭・地域が、その子を取り巻くさまざまな環境との連携の中で子どもたちの成長に関わっていくという視点から、三名の先生方の提案によるシンポジウム形式で会が進められました。

ふじぎくろ支援学校の原満登里先生か

らは、5歳児検診の必要性や就学後の各機関との連携、その連携の範囲や組織の必要性等が今後の課題として示されました。健康科学大学教授の池田由紀江先生からは、発達障害と診断される児童・生徒が増えている中ででの教育現場の課題やその中でスクールソーシャルワーカー等、地域資源との連携の大切さや連携を図っていく上での「キーパーソン」についてのお話がありました。都留文科大教授の森博敏先生からは、教師が親を支えながら子どもに必要な援助を保障する視点の大切さや、子どもの生活基盤を支えるために、学校は福祉との繋がりを視野に入れ子どもの見方や支援の方法を広げていくが必要であるというお話をいただきました。

分科会の中で、さまざまな立場の方々からの意見も伺うことができ、改めてさまざまな観点から特別支援の広がりを学ぶことができました。

(わたなべ えいこ・富士吉田市立明見小学校教諭)



# フィールド・インターンシップスタート!

社会学科環境・コミュニティ創造専攻では、実践領域で活躍する方々から、直接指導をいただく実習科目「フィールド・インターンシップ」が今年度から開始しました。この授業では、第一に、環境保全や地域づくりに必要な日常的な業務の広がり把握すること、第二に、実践活動の現場が直面しているさまざまな課題を把握すること、第三に、多様な参加者の中で、相手の意見を理解し、自分の意思を伝えるコミュニケーション能力を養うことなどを目的としています。夏休み前から、65名の学生たちが、5日〜10日間の実習に挑戦しました。その奮闘ぶりのいったんをご紹介します。

(田中夏子)



スネークセンターでのイベントのようす

## ジャパンスネークセンターで学んだこと

前原 融

私はこの夏、フィールド・インターンシップという授業で財団法人日本蛇族学術研究所（群馬県大田市）が運営するジャパンスネークセンターに1週間研修に行ってきました。

私がこのジャパンスネークセンターを選んだ理由としては、自分の地元の群馬県にあり小さい頃に行ったことがあったこと、また、自分は卒論を動物との共存について書こうと思っているので、その参考にしようと考えたからです。

研修内容としては、飼育ケージの清掃、給餌等の日常業務のほか、来館者が無毒へびと触れ合うことのできる「へびとのふれあいタイム」等のイベントのお手伝いといった、他ではできない貴重な体験をすることができました。

この授業は学生にとって自分の興味のある団体に実際に行ってみて、どのような雰囲気か、仕事内容はどんなものかを

体験できるいい機会だったと思います。自分はこの授業を通じてたくさんの方のことを学ぶことができ、とても有意義だったと思います。

(まえはら) とある・本学社会学科環境・コミュニティ創造専攻3年

## 多くの調整を経て一つのイベントへ

鈴木文志

私は福島県只見町の観光まちづくり協会が9月はじめの5日間、インターンシップを行いました。研修内容は主にイベントの手伝いでした。1日目は水の郷祭りのスタッフとして行動し、2日目はブナ林を歩くという取組みに同行し、3日目は事務的な仕事を手伝い、4、5日目は体験旅行の取組みをスタッフとして手伝いました。

私がインターンに行った只見町は人口5000人程度の中山間地域です。母の実家があり小さい頃からよく行っていたので、只見町のことにはよく知っているつもりでしたが、今回、只見町の良さや現



子どもたちを対象とした川遊びイベントのようす（只見町）

状をさらに知ることができました。

実際に観光イベントを企画する側で働いてみると、こんなに小さな町でも本当に大変なんだなということを知りました。何かを企画すればそれに反対する人もおり、調整するのが本当に難しいと思います。また、たくさんの人の協力があった初めて成立つということ、その地域の良さを知っている人でなければつとまらないとも感じました。

小さなイベントでもたくさんの人が関わっていて、それぞれがしっかりと仕事をし、やっと一つのイベントができる。そのためには地域の行政と市民の連携が大切だということを改めて再確認しました。

（すずき たけし・本学社会学科環境・コミュニティイ創造専攻3年）

## 森林総合研究所を訪れて

島田和宜

私は2009年8月24日から28日の間フィールド・インターンシップとして独立行政法人森林総合研究所多摩森林学園というところに実習に行ってきました。

初日は八王子市にある多摩森林総合研究所で施設内の見学をさせてもらいました。この多摩森林総合研究所は他の森林総合研究所支所と同様に約40haという広大な試験林を所有していますが、他の支所にはないサクラの保存林というものがある

あります。この約4haの土地におよそ2000本近くのサクラが植えられており、サクラの保存方法や種の遺伝子的な交配などの研究に役立てられているそうです。

二日目から最終日までの四日間は多摩市にある森林総合研究所連光寺実験林というところで竹林管理のための管理区域設定や管理区域調査というものをを行いました。

この連光寺実験林の中で自分たちが実習した区域では、主に竹林に関する実験が行われているようでした。私たちが行った作業は研究のために使用する竹林の実験区域を、杭打ちやロープ張りを行って設定し、その設定区域内に生えている竹の胸高直径を測るというものでした。この実験は竹の成長を見なければいけないために5年という長期スパンで見なければいけない実験であり、この測量で得られた結果からどのような土壌及び気候条件であれば竹の生育が良いのかということが分かるのだと私たちの実習担当者であった井春夫さんい はるおはおっしゃっていました。

二日目以降の作業は全て実地作業であったため、林業の現場で働くのがいかに危険であるかということをこのフィールド・インターンで学ぶことが出来ました。

（しまだ かずなり・本学社会学科環境・コミュニティイ創造専攻3年）

平成21年度コミュニケーションカレッジ講座（都留文科大学）

## —文学作品を通して、現代日本の諸問題を考える—

主催：地域交流研究センター

田中実先生の講演

### 「現代人の心の闇について—村上春樹『レキシントンの幽霊』を聞いて

（当日の講演を聞いての感想文を使わせていただきました。）

（時間はいずれの回も午後7時から9時）

#### 第1回

現代人の心の闇について

—村上春樹『レキシントンの幽霊』—

国文学科教授 田中実 10月6日(火)

#### 第2回

歴史意識の大切さについて

—大湊次郎『天皇の世紀』—

国文学科教授 新保祐司 10月13日(火)

#### 第3回

日本の方言分布のかかえる問題点について

—松本清張『砂の器』—

国文学科教授 樋渡登 10月20日(火)

#### 第4回

心と言葉の伝え方について

—中原中也『山羊の歌』『在りし日の歌』—

●国文学科教授 阿毛久芳 10月27日(火)

### 小説を読みきったような感動を覚える

渡辺 愛

小説「レキシントンの幽霊」を読み解く今回の講演を、たいへん面白く聞かせていただきました。細部にこだわって作品を読み解いていき、現代人が孤独のうちに生み出す幸福で閉鎖的なもうひとつの世界、そこから閉め出された者の悲しみが見えてきたときには、聴いていて胸が締め付けられるような思いがしました。そして講演終了後には、文学研究を聴いたというよりはまるで小説を一本読みきったかのような感動を感じました。

私は知識の習得のために研究書を読み、心の充足のために小説を読みますが、優れた研究には小説のように心を動かす面白さがあるのだと考えさせられました。私もこれから研究をしていく身として、

そのような研究ができればと思います。

（わたなべ あい・本学文学研究科国文学専攻1年）

### 細部から作品全体が見えてくるおもしろさ

望月理子

『1Q84』をおもしろく読んだばかりだったので、興味深く田中先生のお話を聞きました。最初に『1Q84』を、主人公に月が二つ見える話、つまりパラレルワールドになっているという前書きがあつて、幽霊の話に移った。語り手の「僕」が遭遇した幽霊のパーティの意味は、ケーシーが、父との100%の愛と、現実の生活とのふたつの世界に生きていくということだったのだ。しかしそれは両立しない。生身の現実を犠牲にしてこそ、完全な愛が成立するのである。それ

を解く鍵は、「僕」が「パジャマで寝ていた」ことに気づくことであると、大いに驚いた。細部から作品全体が見えてくるという不思議な体験を楽しんだひとときだった。今度は、私自身がトリックを解明してみたいと思った。

（もちつき のりこ・教員）

### 作品がもつ矛盾そのものに魅力を感じる

鈴木彩子

静かな死のにおいを感じさせる作品であるが、田中先生のお話をお聞きして、作品の細部の語りこだわって読むことのおもしろさを感じさせられた。例えば、冒頭で語り手「僕」は一連の出来事を「数年前」と述べているが、最後では「ついこのあいだ」となっている。同様な例が他にもある。このように作品内の時間や空間が矛盾し、ねじれているが、それこそがこの作品の魅力なのだろうと感じた。現実が複数あることと現実の一つであることの矛盾は、登場人物たちのそれぞれの真実の愛が、真実であるが故にいびつな形を取らざるを得ないこととしても表出する。言葉のおもしろさに魅せられた貴重な体験であった。

（すずき さえと・高校非常勤講師）



## 訪問演奏を続けています

—都留文科大学吹奏学部

田辺愛子

私たち都留文科大学吹奏楽部は、1年間を通して、春はスプリングコンサートに始まり、夏のコンクール、秋は桂川祭での出店、12月にはその年の集大成として定期演奏会を開催しています。主だった活動としては今述べたものなのですが、私たちは地域の方々の親交もとても重要に思っています。そこで、各行事の際に訪問演奏を受け付けています、という宣伝をしていて、年間十数件程度ですが地域の行事の際にはさまざまな施設などで、演奏と親睦の機会をいただいています。

今年の夏休み中の9月15日には、いきいきプラザで行われた金婚式、ダイヤモンド婚式記念祝賀会にお招きいただき演奏をしました。このときの私たちの部からの参加は20人程度で、記念品を渡す際、BGMを担当させてもらいました。その際に、気をつけたことは高齢者の方々の式典だったので、どうすれば喜んでもらえるかを考えるのに苦労しました。曲を選ぶ際に高齢者の方々が好む曲を今までの訪問演奏の経験から選ぶよう心がけました。所詮待ち時間のBGMだと思っ

ていたのですが、高齢者の方々がしっかりと聴いていてくれてとてもうれしく思いました。中でも美空ひばりさんの「川の流れるように」を演奏しているときには涙を流しながら聴いてくれていた方もいて、こちらまで感動してしまいました。普段私たち大学生は高齢者の方々と同じ時間を共有することが少ないために、とてもよい経験になりました。写真はその時のものです。

他にも高齢者の方とは毎年、デイケアセンターのクリスマスパーティーで演奏する機会があり、そこでも大変貴重な経験をさせていただいています。高齢者の方にかかわらず、地域の幼稚園や小中学校に出向いての演奏などをさせてもらったり、地域のお祭りに参加させてもらう機会も多くあります。私たちは、今は12月の演奏会のために日々練習を重ねていますが、そのような演奏会を開催できるのも、日々の活動も、地域の人々の応援や温かさがあるからこそだと思っています

(たなべあいこ・本学社会学科3年、吹奏楽部)



3月5日に、藤原眞砂氏（島根県立大学総合政策学部教授）と笠松浩樹氏（島根県中山間地域研究センター主任研究員）のお二人が、本学の地域交流研究センターを視察され、本学関係者が対応しました。笠松氏に、そのときの感想を記していただきました。



## フィールドミュージアム構想で印象に残った4つのキーワード

—「時間」「体制」「多様な関わり」「人育て」—

島根県中山間地域研究センター 笠松浩樹

2009年3月5日、フィールドミュージアム構想の視察のために都留文科大

学を訪れました。降り立った都留文科大駅前駅では、フィールドミュージアムの展示室の設置が進んでいました。さらに、駅の横にはジオトープがあり、誰もが見学することが出来ます。駅を出ると、山に囲まれた人口約35000人のコンパクトな都留市全体が生きた博物館になっている様子を実感しました。

大学では、地域交流研究センターの先生方から取り組みのご説明を受け、意見交換を行いました。その中で印象に残った4つのキーワードがあります。

1つ目は、「時間」です。1970年代後半、大学関係者を中心に都留市フィールドミュージアム構想をもち、自然、暮らし、街並みなどを題材に実践と学びの場をつくっていった約30年の過程に、一朝一夕には実現しない重みを感じます。

2つ目は、「体制」です。大学が構想を具現化するために地域交流研究センターを設置されたことは、地域に対する学術機関の役割を考えるうえで参考になり

ました。

3つ目は、「多様な関わり」です。学生サークルが主導する子ども祭り、市民が参加できる授業、カフェの企画運営など、学生と先生がそれぞれの立場で密接に地域と関わっていらつしやることです。また、先生方が都留市の政策形成に寄与されている点に、官学連携の実践を目の当たりにしました。

4つ目は、「人育て」です。学生さんは、フィールドミュージアムでの活動を通して初めて地域コミュニティに触れることが多いとのことでした。社会に出る前に地域に溶け込む機会があることは、若い世代の人格形成の面で大きな効果があると感じます。

フィールドミュージアムの実践から、地域との一体感を進めるための大きなヒントを学ぶことができました。そして何より、その原動力となっている先生方や住民さんの熱意に感動いたしました。

（かままつ ひろき・島根県中山間地域研究センター）

シートン生誕150周年記念

### 「陸のどうぶつ展 哺乳類の不思議な世界」(仮称)の開催予定

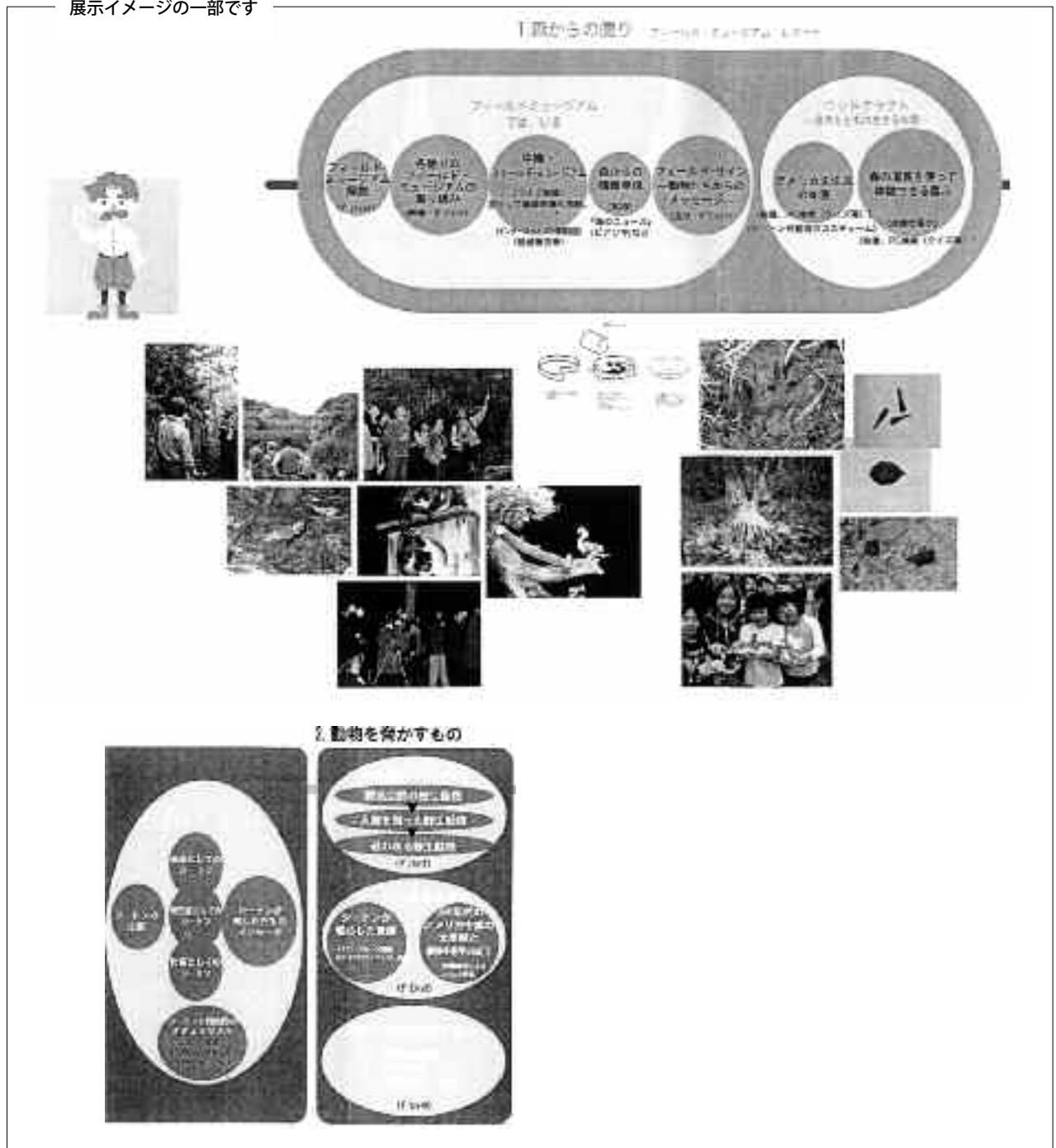
— 国立科学博物館 (東京・上野) —

上野の国立科学博物館で、シートン生誕150周年記念「陸のどうぶつ展 ほ乳類の不思議な世界」が来春3月13日から6月13日まで開催されることになりました。この企画展は朝日新聞社と国立科学博物館の共催ですが、本学名誉教授で、地域交流研究センターの初代センター長である今泉吉晴氏(現在、センター特別非常勤講師)はその監修者で、都留文科大

学も協賛することになりました。この「陸の動物展」については、本誌17号で特集する予定です。

今泉氏には、監訳『シートン動物誌』(全12巻、紀伊国屋書店、1997～98年)、翻訳『シートン動物記』(福音館書店、2003年より刊行開始)、著書『子どもに愛されたナチュラリストシートン』(福音館書店、2002年)などがあります。

— 展示イメージの一部です —



## ●● 編集後記 ●●

○大田堯先生が「見沼フィールド・ミュージアム」(構想)を呼びかけておられ、10月には「見沼懇談会」も主催されました。その構想をインタビューというかたちで語っていただきました。内容は17号へと続きますが、見沼フィールド・ミュージアムを、広く地域社会・地域経済の成り立ちと人間関係の再生の原理にかかわるものとして考えておられます。さまざまな立場と分野の者が心を開いて、対話と共同の実践を見出していけるかどうか。私たちの共通のテーマであるように思います。

○5月13日、14日、15日と、大田先生が都留文科大学のフィールドを視察されました。天候に恵まれた三日間でしたが、とくに14日はすばらしい晴天で、今泉(吉晴)氏の観察小屋への山道はムラサキケマンの花が咲き乱れ、ウスバシロ蝶が飛び交い、夢のような散策の時間となりました。

○本号の特集では、大田先生とともにした都留文科大学フィールド・ミュージアムと、見沼にかかわる人びとや学習グループなどとのあらたな交流のさまを総合的にとらえようとしてきました。

○来春、上野の国立科学博物館でシートン生誕150周年を記念する「陸のどうぶつ展 哺乳類の不思議な世界」(略称「シートン展」)が開催されることになりました。これは本学名誉教授の今泉

氏(本学地域交流研究センターの初代センター長)が監修されるもので、本学はこの企画を協賛することになりました。都留文科大学につながる企画であり、画期的なことというべきでしょう。その思想的意味は、本号の特集と連続するものです。(35頁)

○ネパールからの出稼ぎ労働者の事実は、世界の平和の問題を私たちにとって身近なこととして考えさせます(22頁)。地域の卓越した家庭菜園家の、その知恵と生きる姿勢から学ぶということ(23頁)、「文大ボランティア広場」が活況をみせてきていること(20、21頁)、これらを<哲学する暮らし>として見つめました。

○本学社会学科が「現代社会専攻」「環境・コミュニティ創造専攻」(環コミ)の2専攻をもつものに拡充再編され、3年目に入りました。本号では環コミの実習科目「フィールド・インターシップ」の生き生きとした交流経験をお伝えします。

○本年度に入り編集担当者の交代があり、副編集長には田中夏子氏が就任しました。

○次号は、「子どもたちがすこやかに育つ地域社会の関わりを求めて」と「シートン展」(略称)の二つを特集する予定です。(編集長・畑潤)



絵・成瀬洋平(本学比較文化学科大学院卒業生)

地域交流センター通信 第16号: 2009年12月16日

編集: 都留文科大学地域交流研究センター・通信担当(編集長・畑潤 副編集長・田中夏子 杉本光司 佐藤隆 今泉吉晴 坂田由紀子 筒井潤子 品田栄子 北垣憲仁)

(C)発行: 都留文科大学地域交流研究センター 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 tel.0554-43-4341(代)

総括編集者: 北垣憲仁